

ほっとハート



ランチをのぞけば、人生が見えてくる

〇〇 〇〇

「サラメシ」は、俳優の中井貴一さんがナレーションを務めるサラリーマン（働く人）の昼食をテーマにしたバラエティ番組でNHK 総合にて放送されている。私の一番のお気に入りには「〇〇に昼が来た！」のコーナーだ。このコーナーでは取材先の人物に密着し、仕事ぶりを紹介しつつ、ランチの様子を放送している。

お気に入りのコーナーだが、ランチの内容よりも、その人物の職場での仕事内容を興味深く見ることが多い。先日は、南極大陸の昭和基地で働く調理隊員のシェフに密着した取材映像が放送されていた。こんなところまで取材するとは…さすがNHKだ。昭和基地の調理隊員といっても、民間の多国籍料理店を営むシェフを採用している。街のグルメ雑誌に載るような庶民的な店のオーナーという雰囲気のある男性である。シェフの仕事ぶりや、隊員たちの紹介・昼食を食べている様子を、別の隊員のセルフカメラで撮影したものだった。業務用の調理室で、プロの料理人が、味よし見た目よしの家庭料理を手際よく作っていた。これは関心、とても美味しそう…意外に本格的な料理も並ぶ。約30人分の食事を毎日、毎食作り続けるシェフは、隊員たちの胃袋をがっちりつかんでいる。料理上手なシェフが作る、ホッとできる食事は、過酷な環境で働く隊員にとってまさに癒しの時間だろう。食事風景だけでなく、隊員たちの紹介もされており、機械整備などメーカーから出向してきた専門家たちで構成されていることを初めて知った。いろいろな分野のスペシャリストが協力して仕事を進めていることが分かる貴重な回だった。

普通に生活していたら、気にもかけなかった職業の一面を見ることが出来るサラメシ。社会にはさまざまな職業があり、その仕事に誠実に向き合っている人がたくさんいることを強く感じる。（画面に映る人たちに、直接会うことはないけれど）いつもありがとう、お世話になってます、という気持ちになる。自身も社会の一員として働いていることを再確認する時間になっている。





私の小学生時代

〇年〇組担任 〇〇 〇〇

9人家族。夕飯時になると、いつもみんなで小さなテーブルに集まっていた。母は、夕方遅く、仕事を終えて、台所で食事の準備を始めます。父は、「土曜日の夕飯はお前たちで作れ。そして、お母さんが帰ってきたら、作った夕飯をお母さんにごちそうしよう。」ということになりました。

しばらくは、カレー。「ちょっと塩を加えたりするともっとおいしくなるよ。」などと助言をもらい、だんだんと味が変わっておいしくなっていました。「お前たちの作ったカレーはうまいなあ。」と言われて、「よし、今度はこうしよう。」とやる気になったのを覚えています。やがて、うどんだったり、オムライスだったり、土曜日の夕飯が楽しみになりました。

子供というのはいつでも大人の庇護の対象です。かばって守ってあげる対象です。子供はいつだって、親にお礼しか言えない。みんな親がやってくれるんですから。ところが、子供が夕飯を作ってくれるとなると、親が子供にお礼を言うようになります。「ありがとう。お前たちのおかげでお母さんはご飯の支度をしないですむ。」「とってもおいしいよ。」この励ましで、まただんだんと料理の腕が上がってきます。

振り返ってみると、こういった経験は子供だった私にとってとても嬉しいことでした。これを「有用感」と言います。私は家族にとって、必要な存在であるということに気付かされ、生きる自信、喜びにもつながります。「我が家にとって、案外、私たちは大事な存在なんだ。」社会的承認の欲求が満たされるわけです。恐いお父さんからもお礼を言われ、おじいちゃんからも褒められるようになります。近所のおじさん、おばさんからもよく言われるようになりました。こうして、家族の素晴らしさ、家族の楽しさを、身をもって味わうことになります。

お手伝いにもいろいろあると思います。大人の都合で、「ちょっと新聞を取ってこい。」とか、「お客さんにお茶を出してくれ。」ということがありました。ただ、言われてやっているようでは、「うるさいな。」と感じることはばかりでした。しかし、新聞が届いたら必ず父の部屋に届けるとか、「それはお前の仕事だよ。」というように役割を自覚してそれを果たすことが大切なのだと思います。

これが、家庭参加です。店にお客さんが来たら、すぐに顔を出して、「いらっしゃいませ。」と言い、父に知らせる。そして、お茶を出して「少々お待ちくださいね。」と。これがきちっとできた時には、「いい子だね。お前のおかげだよ。ありがとう。」そういう言葉が親から出ます。家庭の中で、こういう言葉が飛び交うということが大事なんですね。